

『「五感力」を育てる』 斎藤孝＋山下柚実 著

末崎, 雅美
九州大谷短期大学

<https://doi.org/10.15017/9039>

出版情報：生活体験学習研究. 3, pp.101-102, 2003-03-01. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

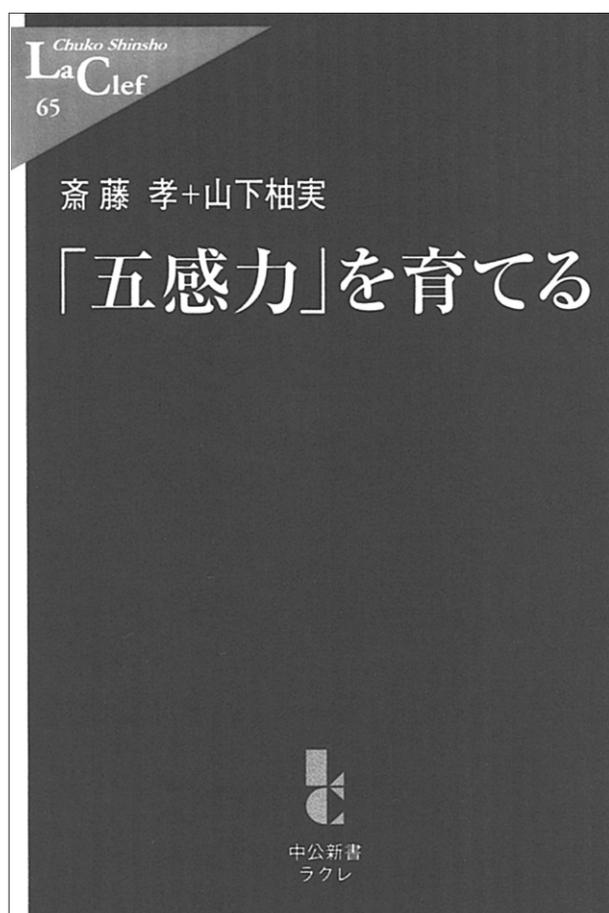
バージョン：

権利関係：



『「五感力」を育てる』

齋藤 孝+山下柚実 著



「五感力」の五感とは、言うまでもなく「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」のことである。五感の発達には身体能力の発達にもつながっており、子ども期の体験不足の問題は、身体能力とともに五感の発達阻害の要因と捉えられる。

この本の著者は齋藤孝氏と山下柚実氏となっている。齋藤氏はベストセラーとなった『声に出して読みたい日本語』（草思社）の著者でもあり、腰と肚をしっかりと据える「腰肚文化」という身体論を基盤にした日本語の暗誦を「齋藤メソッド」として提起し、『子どもに伝えたい〈三つの力〉—生きる力を鍛える』（NHKブックス）では「ことば」を通し、「冷えた身体」を暖め、コミュニケーションする力を鍛えていくことであるという視点から、「生きる力」について、「コメント力(要

約力・質問力を含む)」「段取り力」「まねる盗む力」という〈三つの力〉を提起している。「声に出して読む」という行為が、知力を育てるだけでなく、「しっかり腰・肚を据える」ことで身体能力の発達の土台を鍛えていくことが、今の子どもに必要な、というわけである。

対して、ルポライターである山下氏は、若者の過剰なまでのボディピアス、強烈な刺激、味覚異常など現代的生活の中での感覚異常とも言える現象について、丹念な取材を通し、個々人が抱える背景や問題を明らかにするだけでなく、現代的な普遍的な問題として人間の「五感」が発達不全の状態にあることを、いくつもの著書で指摘している。（『五感喪失』文芸春秋社）

タイトルにもある「五感力」とは、感覚としての五感と身体能力を統合した概念である。子どもに起こっている様々な身体の問題を、「五感の発達」と「感覚と統合された身体能力」という視点から分析してみると、例えば、LD / ADHD 児の多くが身体感覚が十分に育っておらず、触れられることを嫌がる、おんぶができないなど、身体感覚とコミュニケーション能力の発達との関連が見えてくる。

このことについては、エアーズによる「感覚統合」理論が土台となっているが、感覚から入ってくる数多くの情報が脳に流れ込むときに、感覚が十分に組織化されていないと、その情報を脳が整理できず、身体を円滑に操作できない、外的刺激や触れることを嫌がることになる。つまり五感を含め全身の筋肉や関節の動きを十分に発達させることが、子どもの総合的な発達にとって最も基本となるということである。これを応用し、LD / ADHD 児に対して、スポンジたわしで全身を擦る、ハンモックブランコ遊びで全身の平衡感覚を整えるなどの療育も行われている。

顕著な問題を抱えた子どもだけでなく、「背中ぐにゃ」「疲れた」「落ち着きがない」など子どもの一般的な問題と重ねると、自分の身体を自分で感じる力が低下しているから、自分で身体をコントロールする力や身体を支える力も低下しているのではないかと考えることが出来る。よじ登る、飛びつく、何かにぶら下がって飛び降りる運動など全身を使った運動は、木登りや馬乗り、ブランコなど子どもの遊びと同じような質の運動であるにもかかわらず、療育として対処し

なければならない所まできているのである。

『五感を育てる』では、斎藤氏と山下氏からの「五感を育てる10のメソッド」として、日常生活での五感チェック、子育ての場面においてはおんぶタクシーをする、添い寝をしながらの読み聞かせなどの内容で提起されている。

これらのメソッドをみると、ごく当たり前のことであり、「メソッド」として改めて提起されるべきものなのかどうか疑問であるが、五感を育てることを意識して行うことが重要であるということなのだろうか。

日常生活の中で、自然に五感を育てることは困難になってきているのだろうか。子どもの育ちには「メソッド」ではなく、日常的体験として様々な五感の刺激が存在する生活が求められると考える。日常生活の中で、人間を育ててきていた自然の刺激と共存する生活体験のあり方について、こうした「五感を育てる」という視点から考えることも有効であろう。

[中公新書ラクレ、2002年、720円]

(九州大谷短期大学 末崎 雅美)

